# 〝満洲〟・万宝山事件（一九三一年）と中国、日本、韓国文学

## ――李輝英、伊藤永之介、李泰俊、張赫宙――

任　秀　彬

## 第一章　はじめに

二〇世紀前半の〝満洲〟は中国人（漢族、モンゴル族、満州族）、日本人、韓国人が入り混じった空間であった。それは今の国際的都市とは違う別の意味での国際的な空間だった。ただ外国人が隣に住んでいるのではなくて、それぞれの国が食うか食われるかの関係にあり、共存と排他が繰り返される生存競争の場であった。カオスは新しく生まれ変わる新生のイメージをも持っている。そこに興味を持ってか各国の文人たちが〝満洲〟を訪れ、紀行文や小説を書いた。また訪問者ではなく、そこに根をおろしていた人々の中からも作家が輩出された。

本論文は〝満洲〟を描いた文学の中から、特に一九三一年七月に起きた万宝山事件を題材にした中国、日本、韓国の四つの作品を取り上げて考察する。一つの歴史的事件をそれぞれの国の作家たちが違う立場から各々の観点を持って作品化した。それらを比較し総合的に考察すると、作家たちの特徴やそれぞれ国の文壇の情況、国家間の利害関係までがよりはっきり見えてくるのではないだろうか。まずは作家の生涯をその作品活動と創作に大きく影響を与えるであろう思想的側面を中心に整理し、本稿で取り上げる作品がその作家の全作品及び全活動においてどのような位置

を占めているのかを明らかにする。続いて万宝山事件が彼らの創作意欲をどのように刺激して作品を書かせたのか、その執筆の動機や背景を検討する。またその作品が発表された当時の文壇において、また読者の間でどのように受け入れられたのかを検討する。さらにそれらに基づいて作品の分析を行うが、それぞれの作家が作品の中では万宝山事件のどこに焦点をあて、中国、韓国、日本三者の関係をどのように描いたのか、そうすることで何を訴えようとしたのかを考察する。またそれらの作品と類似したものを書いている場合にはそれらの作品の比較も行い、作家がそのような傾向の一連の作品を書いた目的やそれぞれの特徴を把握する。

## 第二章　万宝山事件の顛末

### （1）万宝山事件の経緯

ア、万宝山地域の土地商租権問題

万宝山事件が起きた場所は吉林省長春県郷三区万宝山である。事件が発生した原因は長春に住む郝永徳が日本側と結託して個人的に長農稲田公司を設立した後、一九三一年四月一六日伊通河の東側にある三姓堡官荒屯一帯を蕭翰林、張鴻賓など一二戸と一〇年期間で契約を締結したことから始まる。契約書には県政府の批准がないと無効にすると明記されているにもかかわらず、郝は県政府の許可無しに朝鮮人九人と転租契約をし、朝鮮人農民約二〇〇人が到着するとすぐに水路工事に着手した。これに中国人が抗議し、中国警察がすぐ立ち去ることを数回にわたり命じたが応じなかった。水路が通る一部の土地は契約の範囲外で、了解も得ていない孫永清を始めとする四一戸の所有地であった。(1)

リットン報告書は国際連盟によって作成された満洲事変に関する調査書として万宝山事件についても調査を行っている。それによれば中国側は県政府の許可を得ていないので無効だと主張し、日本側は伊通河流域の開墾計画は一〇年前から立てられており資金事情、灌漑用の水路が不備だったため実現が遅れただけで、万宝山水田計画は一九三一

年吉林省政府と万宝山第三区公安局から正式に許可を得ていると主張した。リットン報告書が最終的には租地契約を県政府の許可を得ていない契約と見なしたことからみると、中国側の言い分が客観的に妥当だと思われたことがわかる。

イ、水路工事と中・日間の交渉

朝鮮人農民たちは四月九日、一〇日、一三日の三回にわたって万宝山地域に入ってきた。四月一三日朝鮮農民一〇〇余人が伊通河の近く馬家哨口に集まって伊通河神に祭祀をとり行い、水路を掘り始めた。五月二〇日中国人の地主や住民ら二一三人が長春県政府に駆けつけて請願すると県政府は公安局長に朝鮮農民を追い出すように命じたが、朝鮮農民は動かなかった。六月二日再び局長に朝鮮農民を逮捕する命令が出され、局長が部下を引率して馬家哨口に行って見ると、日本領事館の警察官中川義沼、嘱託の高橋などがすでに来ていて、朝鮮農民を保護していた。

六月八日、長春市政籌備処長と長春日本領事の間で「韓農墾種田開掘水路問題の臨時協定辨法」が以下の内容で決められた。日中双方の警察はすぐに撤退すること、水路工事を中止すること、事件解決後韓農が立ち去るか残るかは自由であること。そして双方の調査員による調査団を派遣して現地を査察し、六月一一日長春に戻った。しかし調査が終わった後も両側の主張は依然として平行線をたどった。中国側は朝鮮農民の水路計画は中国農民の権利を侵犯し、畑地を破壊するものであること、朝鮮農民が郝永徳から農地を借りたのは県庁の正式許可がなく、したがって無効であることを繰り返し抗議した。それに対して日本側は伊通河の堤防工事による水害や交通の不便が出ないようすること、水路が通る農地には相応する賠償をすることを約束すると言い、郝永徳から土地を借りる際に生じた問題は朝鮮農民に責任がないこと、稲作が広まると地価が上がることなどを説明した。六月中旬までこのようなやりとりが続く中、朝鮮農民の水路工事は日本警察の保護のもとで進んでいった。

ウ、万宝山事件の勃発

六月二六日、数人の朝鮮農民が中国警察に逮捕され、完成された水路の一部が破壊されたことに対し、日本領事館が中国の市政籌備処に抗議し、緊張が一層高まった。そして七月一日の早朝、万宝山地域の中国農民約三、四百人が完成された水路と柳条で作られた堤防を破壊し、土地を現状に復した。六月一二日から現地に駐屯していた日本の警察はそれを射撃で対応した。公安局長が七人の警察と一緒に来て中国農民たちを無事に帰らせた。七月二日の早朝、再び中国農民は水路の埋め立てに押し寄せ、警備に当っていた日本の警察官一五人と向かい合った。このとき、双方が発砲するという事態が発生し、田代領事は更に機関銃を装備させた武装警官四〇人を増派しつつ、関東軍当局をも交えた緊急会議を開いた。(2)

二日間の衝突では双方とも人命の被害はなかった。以後、武装警官の保護のもとで、朝鮮農民は破壊された用水路の復旧、堰止め工事の建設をつづけ、七月一一日には完成通水を見るに至った。(3)

## （3）万宝山事件の余波

ア、満洲事変へ発展

万宝山事件を処理するに当って日本政府は、日本側としての両事件に関する何らの非も認めず、朝鮮内の排華暴動に関する損害賠償を拒否した上、万宝山事件に関しては中国側に損害賠償を要求し、一切の非を中国側におしつけた。更にそのうえ、長年の土地商租権問題のもととなっていた二十一カ条条約の朝鮮人への適用をも一挙に勝ちとろうとした。このような日本政府の方針は、当時数年来の満蒙政策の「行き詰まり」は全て幣原軟弱外交に起因しているとする強硬な国民世論が日本政府の「断固たる態度」を要求する中でとられたものであった。(4)

万宝山事件と平行して、中村大尉殺害事件が発覚した。農業技師になりすました中村震太郎大尉は、チチハル在住

の井杉延太郎予備役曹長らとともに、興安嶺方面を偵察し、将来の対ソ戦に備えて地図作成の任務に当っていたが、途中で中国軍に殺害された。

関東軍はこの事件を満洲における武力発動の口実にしようとし、陸軍中央部も暗にそれを後押しした。驚いた中国側は、九月一八日、殺害責任者・関玉衡中佐らの取調べを始めたことを告げたが、すでに遅かった。

その日の夜半、関東軍は奉天柳条湖付近の満鉄線を自ら爆破した。それを中国軍による攻撃とみなして、軍事行動のきっかけをつかもうとしたのである。五

## 第三章　万宝山事件を描いた三国の文学

### (1)　李輝英の「万宝山」

#### 一．李輝英の生涯

李輝英は一九一一年一月二〇日、吉林省吉林県（現在の永吉県）大金家屯に生まれた。小学校と中学校を吉林省で終え、一九二七年上海に行き、立達学園に入学、後に呉淞中国公学に入った。九・一八事変が発生した頃から反日的な文章を書き始めたが、それには報復の意図があった。(6) 一九三二年処女作「最後一課」を丁玲が主編を勤めていた『北斗』に発表した。(7) 一九三三年三月に上海の湖風書局から単行本『万宝山』を出版している。そのあとも反日を主題にした一連の作品を発表し、左連に参加した。一九三五年上海で『生生』月刊、『漫画漫話』、『創作』月刊の編集に携わってもいる。

李輝英は『再生集』、『人間集』、『豊年』などの創作集を出した後、一九三六年北京に行き、北平作家協会に参加するが、まもなく上海にもどった。上海が激しい戦火に見舞われると、一九三八年救国活動の拠点を武漢に移して碧野、田涛、黒丁などと『戦地報告叢刊』を出した。一九三九年〝作家戦地訪問団〟に参加し、その体験を題材にして翌年短編集

『夜襲』と『火花』を出している。抗日戦争に身を投じる青年の姿や革命に目覚める民衆を描いた長篇小説『松花江上』もこの時期に書き、一九四五年重慶の建国書店から出版した。戦争が終わると東北に帰り、長春大学および東北大学で教授の任に就いたあと、一九五〇年香港にわり、自分の抗日戦争体験をもとにして抗戦三部曲『霧都』『人間』『前方』を二〇年かけて書いている。一九六三年から一九六六年まで香港大学で東方語文学院の国語教師をつとめ、一九六六年から一年間中文大学中文系の講師を務め、教職の傍ら『烈風』、『文学天地』、『筆会』などの文芸雑誌も編集した。『中国新文学史（一九一九～一九三九）』『中国小説史』『中国現代文学史』などの文学研究書も書き、一九八四年一二月には北京での中国作家協会第四次作家代表大会に参加した。そして香港で没したのは一九九一年五月一日のことである。

## 二．「万宝山」の執筆と発表当時の評価（一九三二年五月脱稿、一九三三年発表、約一〇万字）

李輝英は「万宝山」を発表する前に、九・一八事変の後日本軍に苦しめられる東北地方の人々の悲惨な姿を描いた処女作「最後一課」を『北斗』に発表して、丁玲から目をかけられ、東北地方を題材にした長篇小説を書いてみるように勧められた。彼は一九三二年七月東北に帰り、吉林、長春、ハルビン、沈陽、大連などの都市と奥地の農村を訪れて、創作の種を収集した。[8] そのときの旅程や心境を「還郷記」に記している。そこで日本帝国主義の侵略で踏みにじられた故郷を目の当たりにして、抗日闘争しか生きる道がないことを確認し、九月に上海に戻ってから抗日題材の小説、散文を立て続けに発表した。

「万宝山」が発表されたのは一九三三年一月だが、実際書かれたのは一九三二年三月から五月までのわずか二ヶ月の間であり、[9] 東北地方に行く前に既に完成していた。つまり彼は新聞の報道などをもとにして書いたのである。「万宝山」は抗日闘争を扱った叢書の一巻であった。一冊目が張天翼の『歯輪』で、二冊目が陽翰笙の『義勇軍』、『万宝山』が三冊目であった。蕭軍の『八月的郷村』が一九三五年八月に、蕭紅の『生死場』が一九三五年一二月に出版されたこ

とを考えると、李輝英の「万宝山」は最初の抗日文学であったと言えるだろう。

茅盾が東方未明の筆名で『文学』に「作者はひとりの朝鮮人金老人の口を借りて朝鮮人の痛苦や日本帝国主義の凶暴を語らせ、ひとつの政治的煽動を作り上げる。作者はまた、万宝山の農民が圧迫された朝鮮農奴に対していかにして次第に〝階級的同情〟を感じ始め、そして最後には統一戦線が成立するのかを書いている。作者は階級意識によって民族意識を克服しようと努めている」と批評を載せた。[10] この作品で新人だった李輝英は文壇に名を知らせることができたのである。

## 三、作品分析

### ア、万宝山事件の文学的変容

前節にも書いたように李輝英は「万宝山」を執筆する時に実際現地に赴いて調査を行きってから書いたのではなく、報道された内容をもとに自分の想像力を働かせて万宝山事件を作品化した。[11] 「万宝山」には万宝山事件にかかわりのある人物たちが実名で登場する。そして四ページにもおよぶ「地主蕭翰林張鴻寶等十二人與郝永徳所訂租地契約」と「郝永徳與韓人李昇薫等九人所訂転租契約」がそのまま写されている。[12]

しかし李輝英はメディアの報道を骨子にプロレタリア文学的な肉付けをした。事件の流れに沿いながら、表面的に現れる中国人と朝鮮人の土地をめぐる争いではなく、帝国主義の侵略政策と半封建的な農村の社会システムを打ち破ろうとするメッセージをこめて物語をつくったのである。この点が李輝英の「万宝山」が他の三つの作品と最も異なる立脚点である。

この作品に登場する朝鮮人には二つの部類がある。郝永徳から土地を借りて一時的に小地主になった者と水路工事を監督する者が搾取階級として、彼らに雇われた多数の朝鮮人苦力が被搾取階級として描かれている。この二つの集

団は同じ民族であることの意識はほとんど現れず、階級の対立意識だけが問題視されている。

実際に万宝山地域に入植しようとしていた多数の朝鮮人農民は苦力ではなく、自作農か自作を兼ねた小作農であった。彼等は水田にできる土地を探して満洲をさまよい、やっと万宝山地域に入ってきた。彼らの目的は荒地の開墾と水田の建設であるにもかかわらず、この作品に登場する多数の朝鮮人貧農たちは土地に対する執着がまったくなく、都市の工場労働者が資本家に向ける階級意識をそのまま工事監督に対して持っている。このような設定には無理があるのではないかと思われる。この作品のように水路が埋められてそれを勝利だとすると、そのあと朝鮮人の農民たちはどこで何をして生活ができるのか。作品はここで終わってしまうので、読者は想像するしかないが、作品の中には中国の農民と連帯して水路を埋めた後、朝鮮人農民がどうなるか暗示さえもされていない。

しかし万宝山事件が終わったあと、事態を収拾する段階で中国と朝鮮の両民族が連帯して日本帝国主義に立ち向かったのは事実である。万宝山地域で起きた中国農民と朝鮮農民の決して大きくなかった衝突、それを中国東北地方への侵略に利用している日本帝国主義の陰謀を明らかにする過程で、両民族は連帯の必要性を痛感して各団体が声明を発表した[13]。このような動きを作品のなかに取り入れているところが、万宝山事件の約一年半後に発表された時この作品を読んだ読者の同感を得たに違いない。茅盾は上記の批評の中で、作者が持っている東北三省をめぐる状況の認識が不充分であると批判したが[14]、階級意識が民族意識を克服して共同戦線が成立したのがこの作品の取るべきところだと認めた[15]。

また、この作品は階級意識を強調するために中国の官憲と日本の警察を支配者という同じ性質のものとして片付けている。

これは支配者である国民党への不満を現すための設定であるが、国家と国家間の外交問題、主権問題を考慮しなかったもので、当時の事情を正確に反映しているとは言いがたい。農民と官憲が中国という国家の利益のもとに団結する

のではなく、国民党を倒すべき革命の対象としてとるのである。作品中の中国の官憲も暴動を起こすのは共産党ではないかと疑ってそう決め付けている。万宝山事件をプロレタリア革命と結びつけようとしてこじつけた感がなくもない。

イ、人物の形象化

郝永徳は万宝山事件にかかわりのある実在の人物である。李輝英は彼を日本の勢力に便乗して国の安危を考えない所謂売国奴として描いている。彼がいかにして長農稲田公司の社長をつとめることになったかを、また彼と中川警部の関係を描写することで、日本帝国主義と売国奴との結託を読者に分かりやすく理解させた。

しかし郝永徳は馬宝山、李竟平、金福父子と対立する否定的人物であっても、初めから終わりまで何の躊躇もなく中川の言いなりになる平面的な性格として描かれてはいない。彼は中川が話す日本帝国主義の野望に恐ろしさを感じ、朝鮮人のように亡国の民にはなりたくないと思って、中川の条件を飲み込むか心の中で葛藤する。そして国がなくなっても自分にお金さえあれば大丈夫だと結論を出す。李輝英は簡単に片付けられがちな人物にも立体的に見えるように揺れ動く心理をも描いている。

この作品の中でいちばん盛り上がるところは朝鮮人苦力の金福親父が中国人の大家さん張福に自分の身の上話を熱く語る場面ではないだろうか。彼は五人の息子を亡国の民であるため次々と失った。長男は貧民の中に入り込み愛国心を吹き込んで、日本帝国主義に抵抗する教育を秘密裏におこなったため、日本警察に捕まり消息が絶えてしまった。次男はロシアから帰って間もなく失踪し、三男は台湾に向かう船の上で日本人に捕まり、海に投げ出された。四男は煽動の罪で裁判にかけられることもなく始末された。李輝英は八〇歳にもなる金老人に国を失った痛苦と帝国主義の恐ろしさと中国もその勢力に蝕まれつつあることを熱く語らせた。

しかしこの後、金福父子の活躍はほとんどなく、街から来た学生李竟平と馬宝山の話を聞いて朝鮮人苦力たちに連絡し、また中国人農民に朝鮮人の境遇を分からせる例として出される程度の役割しか果たしていない。したがって人物に特徴も個性もなく、描かれきってない感が否めない。

その点は学生李竟平にも同様に言える。彼は何の説明もなく馬宝山の家に招かれてきて農民たちに郝永徳と朝鮮の工事監督が農民たちを騙していることや日本帝国主義の万宝山まで勢力を伸ばしていることについて熱弁を振るう。彼のこのような登場は農民たちに状況を手早く悟らせるために無理に持ってきた感じを与える。知識人が無知蒙昧の農民を啓蒙して行動を起こさせるのはプロレタリア文学にしばしば使われている常套手段である。あとで取り上げる「農軍」の作者李泰俊の作品「農地」にも無知で無力だった農民オクソェ（억쇠）が社会主義建設のために農民を教育しに来たソンユン（성윤）ら社会主義者たちによって啓蒙されていく姿が描かれている。李泰俊の場合「農地」は、美的自律性を追求していた芸術至上主義を捨てて、歴史の中で役立つ革命分子になることを選んだ過渡期の作品でもあり、自分に言い聞かすような過度な社会主義の信念が目立った。李輝英にも同じことを言える。彼は文学作品を暇つぶしするためのものだと思って、花鳥風月を詠んでいたが、九・一八事変で故郷が蹂躙され、一・二八上海事変で通っていた学校が空襲に遭ったことから、自分の創作方向を変えたと述べている。(16)

李輝英は過剰な義務感を持ち、実用性を重んじたせいで、一人一人の人物には細心の注意が払われておらず、作品の文学的技巧も効果をあげていない。文学的技巧については次の節で述べよう。

ウ、作品の文学的技巧と意義

この作品を生硬な文章にしているものには、所々にあふれている無数のスローガンめいた言葉をあげることができる。李竟平の演説の時にもわざとらしい相槌のような言葉が群衆の中から飛び出ている。そして作品の後半になると

エクスクラメーションマークの連続になる。

壕を埋めよう！抑圧されている人民よ、団結しよう！人民を欺く官僚を打倒しよう！弱小民族を抑圧する日本帝国主義を打倒しよう！武力で自衛しよう！全世界の革命成功万歳！[17]

日本帝国主義を打倒しよう！全ての帝国主義を打倒しよう！中韓の抑圧されている民衆は団結しよう！中韓民族の解放万歳！[18]

必要な時、スパイスを利かせるように適所で使うと効果が出るはずの力強い歌い文句も、使いすぎると張りがなくなって却って緊張感を緩めてしまう。いちばん盛り上がるはずの中国・朝鮮農民の連帯蜂起が臨場感や緊張感を感じさせないのはそのためであろう。

しかしながら文学的な未熟さにもかかわらず、この作品が持つ意義が大きいのはそのメッセージにあるといえるだろう。希望を抱かせるような来春の情景を描いている冒頭が象徴的に語るように、首尾一貫して結末も両民族の団結や闘争を励している。

### (2) 伊藤永之介の「万宝山」

一．伊藤永之介の生涯

伊藤永之介は一九〇三年一一月二一日、秋田市の菓子屋の五男として生まれた。本名は栄之助。尋常高等小学校を卒業し、父の勧めで日本銀行秋田支店で働きながら、伊藤紫明（紫明は二葉亭四迷にあやかって名づけたという）の筆名で俳句、短歌、小品を投稿するようになった。一九二一年、新秋田新聞社に入社し、北村光の筆名で

同紙に社会時評や文芸評論を発表した。同郷の金子洋文、今野賢三らによって「種蒔く人」が創刊されたことに刺激を受け、社会主義思想に関心を示すようになった。一九二四年、同郷の先輩金子洋文を頼って上京、九月に金子が編集を担当していた『文芸戦線』に処女作「泥溝（どぶ）」を発表して文学的出発を遂げる。また横光利一の「御身」を取り上げた「新作家論」という新感覚派への批評が注目され、『文芸時代』にも評論家として迎えられる。一九二八年、「労農芸術家連盟」に加入、おもに『文芸戦線』に拠って活動する。「見えない鉱山（やま）」、「木枕」、「山越え」などを同誌に発表。一九三〇年に「総督府模範竹林」を『文芸戦線』に、「平地蕃人」を『中央公論』に発表。一九三一年「改造」に発表した「万宝山」が話題になった。鶴田知也の「コシャマイン記」が芥川賞を受けたのに刺激されて一九三六年「梟」を完成した。以降鳥類物と呼ばれる一連の作品を発表し、独自の農民文学を開拓した。一九四四年七月から一一月までの間、陸軍報道班員として徴用を受け、中国の湖南地方で過ごした。

戦後も「雪代とその一家」、「なつかしい山河」などの農民文学を書きつづけ、警察の調室を通してみる貧しい農民の挿話を描いた「警察日記」が映画化された。一九五四年には和田伝らと計らって「日本農民文学会」を興し、一九五六年「日本文化人中国訪問団」団員として中国に訪れた際に宴席で趙樹理と隣り合って〝有朋友遠方来　不亦楽乎〟とネームカードの裏に書いてもらってもいる。[19] 一九五九年『消える湖』が風水社から、『三太郎』が東洋文化協会から刊行されたが、同年七月二六日脳溢血で死去している。[20]

## 二．「万宝山」に対する同時代評

伊藤永之介は一九三一年一〇月『改造』に「万宝山」を発表した。その次の号で宇野浩二が「文学の眺望」を書き、近作では「万宝山」が優れていると好評した。[21] いっぽう『東京日日新聞』には酷評も載っている。改造の一〇月号が発売されてまもない九月二五日に宮本顕治は「藤森成吉の『転換時代』・その他」という文章の中で「万宝山」は、現

象的リアリズムの一つの見本といえるもので、この百枚近い小説をよむより、『産業労働時報』八月にのっている「万宝山問題」という短い記事をよんだ方が、より具象的に問題の本質をつかめるとまで言った。それは万宝山事件の本質的契機をなす帝国主義的矛盾の鋭い対立が描かれておらず、漠然とした背後の力とおぼしいものがお義理の程度でふれられているにすぎないからであると批判した。(22)

二つの批評がこれほど対照的なのは批評家の傾向によるものであろう。宇野浩二自身はプロレタリア作家ではない。いっぽう宮本顕治はナップ派に属していた。当時宮本顕治が属していたナップと伊藤永之介が属していた文芸戦線派は鋭く対立していた。とはいえ宮本の批評はいやがらせのような無い物ねだりをしているわけではなく、理にかなっている部分もある。それについては作品分析の節で論ずることにする。

## 三、作品分析

### ア、執筆の影の協力者

「万宝山」を読んでいると分かるように、裴貞花(ペチョンハ)、趙判世(チョパンセ)、姜点始(カンチョムシ)、金光水(キムカンス)のような人名や地名、麦粥(ポリチュク)、湯器(タキ)、粥桶(チュクトン)など日常用品の韓国語読みや歌アリラン、些細な日常的な習慣など当時の朝鮮について詳しく知らないと書けないものがたくさんある。伊藤はどのようにしてそれらを知っていたのか。伊藤の周りには中西伊之助、黒島伝治などの作家がいて、彼らは早い時期から朝鮮やシベリアなどの植民地を題材にした作品を発表していた。(23) 特に中西伊之助とは『文芸戦線』の編集にともに携わっていただけでなく、伊藤がはじめて上京した時泊めってもらった金子洋文の一家が住んでいた長屋と隣どうしであった。「赭土に芽ぐむもの」で日本帝国主義の植民地支配に抗する朝鮮農民と、国内での闘いに敗れて朝鮮で再起を期す青年を描いた中西から教示を受けた可能性も考えられる。

一九一〇年以後数多くの朝鮮人労働者が自分の意志にせよ強制連行にせよ日本にわたって、日本人の半分ほどの賃

金で働いていた。そして彼らの中から社会主義に目覚めて積極的にその運動の中心に立つものが出てくると、彼らは日本人の社会主義者やプロレタリア文学者たちと親密に交流した。[24]

伊藤永之介が「万宝山」を書いた際に朝鮮人の青年が関わっていることは、伊藤自身による「文学的自叙伝」から分かる。

> そのころ上京して来た弟と、植民地を描いた私の作品を読んで訪ねて来てゐるうちに失業して転げこんで来た朝鮮の李君とを加へた六人の家族を、わづかな編集手当だけでやって行かなければならない一寸言葉では言ひようのない位の家のなかの有様を振り返りもせずに、「文芸戦線」の編集の仕事で駆け回りつづけた。[25]

この朝鮮の李君についてはほかに何も言及されていないので、どのような人物であったのかその詳細は分からないが、彼が伊藤の「万宝山」執筆中に一緒にいたことは明らかである。伊藤は植民地に関する文献を読んだり、資料を探したりした上に、[26]朝鮮について何でも聞くことができるのは創作に大いに役立ったに違いない。

イ、万宝山事件の文学的変容

伊藤は植民地支配の不当性や朝鮮人の不幸を語るために万宝山事件を彼なりの観点で解釈した。

第二章で述べたように万宝山事件は形としては中国東北地方での朝鮮農民の生存権を日本の警察が守るようにして展開していった。それが伊藤の「万宝山」のなかでは日本警察が傍観的な態度を取って、中国側と日本・朝鮮側の力関係が事実とは逆転してしまう。それは朝鮮農民の悲惨な情況を強調するためではあるが、日本警察が積極的に関わった事実を無視すると事件の真実は見えてこない。日本の国籍をもっている朝鮮農民を保護しなければならなかった理

由が分からなくなるからである。

記録によると事件が発生した七月一日には中国人農民五〇〇人に対して日本の警官が九人現場に送られ、翌日には警察官一五人と機関銃を装備させた武装警官四〇人を増派した。ここでは中国農民より中国兵士が主導的に攻撃してきて、対決らしい対決もないまま事件がおわっている。

最後の激戦の場面では緊迫した状況にリズムをつけて表現しようと文ごとに行を換えているが必ずしも成功しているとは言い切れない。そして平野謙が「ここに描かれている〝事件〟が果たして数日間のことか、数ヶ月のことか、幾年のことかも分明ではない責任まで、読者が負わねばならぬ必要はなかろう。（中略）どうやら〝ここに描かれた事件〟は、最初から最後までは二ヵ年ほど経過しているらしいが、二年間も経過した事件にしては、その時間処理の方法が曖昧である。[27]」と評したことに対して杉森正弥や浦西和彦[28]は平野謙の間違いだと一蹴している。

しかしながら、長篇である李輝英の『万宝山』と張赫宙の『開墾』は別としても字数がほとんど変わらない李泰俊の「農軍」と比べてみても確かに時間の流れが分かりにくい。それは伊藤の「万宝山」が平面的に時間に沿って事件を叙述するのではなく、あくまでも主役は裴貞花と趙判世で、万宝山事件は彼らが代表する朝鮮農民の悲惨な境遇を際立たせるだけの役割をしていることによるからである。中国東北地方にわたってきてからの回想シーンがところどころ挿入されるのも万宝山事件をあまり知らない人には一回読んで理解するには紛らわしいかもしれない。

前節であげた宮本顕治の、「万宝山」への批判も平野謙の批評と同じように、万宝山事件の真中にある人物や彼らが送っている生活のディテールにこだわった結果、事件そのものはわかりにくくなっているところに向けられているといえよう。

ウ、作品の文学的技巧と意義

「万宝山」は実話をもとにした作品なので伊藤は実際小説を書くときに、作品が新聞記事のようにならないよう入念に文学的な色付けを施した。

「今の言葉でいへば報告文学といっても差し支えないやうなものであるが、自分では決してさう言ったやうな実用だけのものに終ってゐないと思ってゐる。[29]」と作者自身が述べているがその工夫のひとつが固有名詞の変容である。長秋―長春、井通河―伊通河、橋林省―吉林省、三世堡―三姓堡、三荷屯―三家屯、峰天―奉天、間島―間東のように日本語で訓読みした時に同じ漢字を使って（長秋―長春を除く）、虚構の舞台を作ろうとしたのである。

伊藤永之介の文学的出発は創作段階の前に横光利一の「御身」を取り上げた新感覚派批評であったことはまえに述べたとおりである。彼自身も「万宝山」を書くときに随所に新感覚派的な表現を散りばめた。「再び一緒になるまでの苦い記憶が、彼女の頭蓋の内側を硝子の破片のやうに痛くかけ廻った。」「紐のやうな雨が降った」「樹木は呻いた。ブルブルとたまらなさうに錆びた雑草が身慄ひした」「乾き切った地べたを、雨はまるい丸になってコロコロ転げ廻った」「それが見る見る水溜まりになると、地べたの凹みが、ゴクゴク咽喉を鳴らしてのみ込んだ」など伊藤の文体はまさに横光の「真昼である。特別急行列車は満員のまま全速力で駆けていた。沿線の小駅は石のように黙殺された[30]」と匹敵するほど新鮮な表現であるといえよう。

### （3）李泰俊の「農軍」

#### 一．李泰俊の生涯

李泰俊は一九〇四年一一月四日江原道鉄原に生まれた。父は地方に派遣されてきた官吏であったが、日韓併合の前年一九〇九年一家をあげて故国を背にしてロシア領ウラジオストックに亡命した。その年の八月に父が死んで、朝鮮に戻るが、一九一二年には母にも死なれて、親戚に預けられた。宿屋で二年間働くなど仕事のかたわら勉強を続け、

徽文高等普通学校に入学。しかし四年生の時同盟休校の首謀者とされ退学し、日本に留学した。一九二五年短篇小説「五夢女」を『朝鮮文壇』に投稿し、それが入選した。一九二六年上智大学予科に入学し、新聞配達と牛乳配達をしながら困窮した生活を送った。のちに有名な作家になる羅稲香などと交遊。一九二七年上智大学を中退して帰国した。一九二九年　開闢社に入社し、『学生』、『新生』などの雑誌の編集を勤めるなか、コントなども発表した。一九三一年『朝鮮中央日報』の学芸部記者になる。一九三三年朴泰遠、李孝石、李箱、金裕貞などと「九人会」を結成した。九人会は明白な旗幟を捧げなかった文人たちの親睦団体だったが、全体的には当時のプロ文学や民族主義文学などの既成文人に対して反発し、文学の自律性や形式、言語に対する積極的な関心を表明した団体であった。彼らの活動は日本の軍国主義が強化し始まった時期、ＫＡＰＦ解散を前後した一九三〇年代半ばが一番活発だったが、一九三七年李箱、金裕貞の死と中日戦争をきっかけにその集団としての性格が弱まり、文学的傾向も少しずつ変化を表した。[31] 一九三五年朝鮮日報社を退社し、創作に没頭、一九三七年短編集『鴉』『九遠の女像』『第二の運命』が出版、「五夢女」が映画化された。一九三八年満洲を旅行し、翌年『文章』夏期増刊号に「農軍」を発表した。一九三九年から『文章』の編集を任された。皇軍慰問作家団、朝鮮文人協会で活動し、一九四二年朝鮮芸術賞を受賞する。一九四三年から独立まで田舎で暮らす。その時の生活と心境が「解放前後」に詳細に綴られている。この作品の主人公ヒョン（현）を通して、植民地支配の統制に苛まれたあげく、江原道の田舎に隠居した自分の体験を吐露している。

独立後文化建設中央協議会、文学家同盟などの組織に参加し、一九四六年北朝鮮に渡る。「解放前後」を発表し、この作品で第一回解放文学賞を受賞。一〇月にソ連を訪問。このソ連への旅行が彼を熱烈な社会主義革命の戦士に急変させた。この変化は当然彼の作品にも影響を与え、解放後初めての長篇小説「農地」で植民地時代には抑圧され、搾取されつづけた無知な農夫が解放後には土地改革の伝道師になる姿を描いた。このように北朝鮮の体制に応じる作品を書いたにもかかわらず、彼は南労党出身党員を粛清する政治運動に巻き込まれ、過去九人会での活動の反動性や思

想の不徹底さを追及され、ブルジョア反動作家というレッテルを貼られ、粛清された。コンクリート製造工場や炭鉱に狩り出され一九六九年以降消息が絶たれた。

二．邦訳題名の問題

作品分析にはいる前に「農軍」という題名の訳について誤解がないように断っておきたい。「農軍（ノングン＝농군）」は字面から農民軍というイメージを与える恐れがある。しかし「グン＝군」という接尾辞は「～する人」の意味で、「軍＝군」は当て字であると思われる。「グン」という接尾辞は現代韓国語の表記法では「クン＝꾼」と定められている。その用例には一、否定的な意味である事を習慣的にする人．Ex 술꾼＝飲兵衛、노름꾼＝ばくち打ち二、主に肉体的労働を生業とする人．Ex 나무꾼＝樵、짐꾼＝ポーター　三、密かに不正を働く人．Ex 염탐꾼＝スパイ　四、ある事を上手にやりこなす又はたしなむ人．Ex 살림꾼＝家事を上手く切り盛りするひと、씨름꾼＝相撲取り　五．群をなしてある行動をする人．구경꾼＝野次馬或は見物人　がある。三二農軍は2に該当するもので、農民の意味である。そのため三枝寿勝氏は「農民」と訳している。しかし本稿でテキストとして使っている『近代朝鮮文学日本語作品集一九三五―一九四五』創作篇には「農軍」と訳しているので、それに従うことにした。

三．作品分析

ア、万宝山事件の文学的変容

ほかの作家の作品を分析する時と比べて、李泰俊の場合は満洲に旅行に行って取材した記録を詳細に残しているので、彼が万宝山事件を文学作品として再構成した時意図していたものがよりはっきり見えてくる。

まず、李泰俊は中国人と朝鮮人双方に死傷者がなかったことを知っていながら、[33]「農軍」には朝鮮人が打たれて死に、

主人公も銃傷を負ったことを描いている。そして中国農民が蒙る被害についても、李泰俊は承知していたにもかかわらず、[34] 作品ではたいしたことでもないように描いている。

また「農軍」には満洲が明るい未来のある土地としても描かれている。万宝山事件は水路が埋められ、朝鮮人農民たちが外のところに移ることで終わったにもかかわらず、「農軍」の結末は水路が完成し、畑には果てしなく水が張っているという描写で終わっている。これは読者に満洲に行けば最初は苦労するが、一生懸命仕事すれば報われるというメッセージを伝えているのである。また「農軍」の冒頭には「この小説の背景満洲は張作霖政権時代であることをお断りする」と書かれている。[35] これは〝満州国〟建設のまえには朝鮮人が苦しい情況にあったが、〝満州国〟建設後の今はそうではないという暗示として読むこともできる。満洲事変のあと、満洲への移住政策は一層強化されて、満洲に移住する人口は三、五倍に増えた。その意味で一九三九年という満洲への移住政策がピークを達した時期に発表された「農軍」は多分に時局協力的な性格を帯びているといえよう。

では李泰俊はどうして万宝山事件を題材にして親日的な作品を書いたのだろうか。それにはまず検閲の問題を考えられる。一九三〇年代末には厳しい検閲制度があって、時代状況や現実的な社会問題を扱う作品はほとんど発表できなかった。李泰俊は作品の発表の場を確保するためにやむをえなかったかもしれない。もう一つ考えられるのは彼が『文章』の編集を担当していたことである。一九三九年頃は用紙が不足しており、総督府から用紙の節約、出版物の発行回数の減少や廃刊がすすめられた。このような時に『文章』は枚数が通常の二倍の増刊号を発行しており、「農軍」はまさにその増刊号に載っているのである。[36] 李泰俊は自分が編集を担当している雑誌を継続させるために、日本帝国主義に協力的な「農軍」を書いたとも考えられる。

イ、移民文学としての「農軍」の意味

韓国現代文学には間島移民文学[37]と呼ばれる一群の作品がある。日韓合併以後、数多くの朝鮮人が経済的な理由、政治的な理由などで、中国の東北地方や北京、上海のような大都市、そして日本にわたった。このような情況を反映して「移民、失郷、離散、流民」などの主題が描かれた。満洲事変を前後して間島に移民してそこで生活を営む作品が急増した。そして一九四〇年代に朝鮮本土では朝鮮語を使って教育ができないのはもちろん、一切の出版が禁じられると、『満鮮日報』、『間島日報』に発表された間島での朝鮮語文学は韓国現代文学を守る最後の砦になり、五年間の韓国現代文学の控白を埋める宝庫である。間島移民文学の代表的な作家と作品としては安壽吉の「稲」（一九四〇）、「夜明け」（一九四〇）、『北原』（一九四三）、姜敬愛の「人間問題」（一九三四）、「塩」（一九三四）、「地下村」（一九三六）、崔曙海の「脱出記」（一九二五）、「飢餓と殺戮」（一九二五）、「紅焔」（一九二七）、朴啓周の「赤貧」（一九二九）、「処女地」（一九四一）、尹東柱（詩人）の「もうひとつの故郷」、「星を数える夜」などがあげられる。

安壽吉の代表作「稲」は吉林省XX県に移住した一三戸の朝鮮人たちが水田を開拓し、村を作り、学校を建てるが、中国軍人たちに妨害され、数回衝突し、命を落としていく話である。結末には「農軍」のように中国人の銃口の前で自分たちが開墾した水田を命がけで守る姿が描かれている。これらの作品に登場する移住農民たちは故郷を捨てて、或は追い出されて新しい新天地を開こうとする希望に満ちている。ある意味でこのような移民文学は新世界を追求する物語でもある。

また「農軍」は、一九二〇年代から本格的に書かれ始め、一九三〇年代に二つの作品群をなした農民小説の一つとしても読むことができる。農民小説は大きく分類して、理念志向的な作品群（闘争型、啓蒙型）と現実描写的な作品群（保守型、離郷型）に分けられる。[38] 植民地政策がますます農村を疲弊させて、農民たちの離農現象が社会問題として台頭したのに対し、革命的イデオロギーをもって農民を啓蒙し戦うことを唱えたものが理念志向的な作品である。農村と農民がいかに惨憺たる情況に置かれているのかを描いたのが現実描写的な作品である。「農軍」は離郷型の後者に属する

といえる。

柳昌権一家の場合は移住民のなかでも比較的に経済的条件がよかった。大多数の移住民は土地もなくし仕事も見つからず、生存のための最後の手段として中国東北地方まで行ったが、柳昌権や彼を呼んだ黄采心は投資型移民と言える。

最後に言語認識の問題をあげよう。「農軍」は四つの小説の中で唯一中国人と朝鮮人との言語不通の問題を意識した作品である。多くの朝鮮人〝満州〟移民が朝鮮南部から来たにもかかわらず、「農軍」以外の作品では中国人と朝鮮人とがなんら不自由もなく意思疎通ができる。これは他の作品の作者が移民した朝鮮人たちの暮らしを観念的考えていたことを示唆しているのではないか。当時朝鮮の文壇にはたくさんの間島移民物語があり、移民した人たちの実際の暮らし振りが観念的ではなく、もっとリアルに身近に伝わったので、読者の目も細部まで届いていたのである。何の説明もなく「万宝山」の金老人のように中国人を相手に、熱弁を振るうと不自然に思われたであろう。だた、言語を問題にしたのは韓国人作家による作品だけというわけではなく、中国人の作家戴平万による「満洲瑣記」でも触れられている。この作品に登場する朝鮮人少女佩佩は北方話が上手くないので、すぐ朝鮮人だと身元が判明し職にも就けず軽蔑されるので、早く上手に喋りたいといい、いっそのこと中国の南方話をいくつか習って、身元が判明しそうな時は南方からきた中国人だとごまかしたいというエピソードがある。

### （4）張赫宙の「開墾」

一．張赫宙の生涯[39]

張赫宙は一九〇五年慶尚南道大邱で妾腹の子として生まれた。幼い頃母に連れられて朝鮮南部を転々とした後、慶州の普通学校、大邱の官立高等普通学校を経て、一九二七年から私塾で教師として働く。一九二九年からは大邱で小学校の教師をしながら習作を書く。一九三二年『改造』誌懸賞に短篇「餓鬼道」が入選し、東京に三ヶ月滞在する。

一九三三年『文芸首都』の同人となり、東京へも数度往来した後、一九三六年からは本拠地を東京に移して著作活動に専念し一九三七年頃から多くの単行本を出版した。彼はちょうど日本のプロレタリア文学の衰退期に登場した同伴者文学的作風の作家だったため、プロレタリア文学陣営から熱い視線をもって迎えられたが、日本プロレタリア作家同盟への加入を断り、朝鮮風俗物に路線転換して日本での作家生活を続けた。[40] 一九三八年自作戯曲『春香伝』を京都で公演、一九三九年第二次ペン部隊の一員として〝北支戦線〟、移民状況を視察した。同年一〇月に「開拓地帯」を出版。一九四二年にも中国東北地方を訪れて万宝山事件を取材して一九四三年「開墾」を発表した。彼は一九四二年第一回大東亜文学者大会に準備委員として参加したことがあり、一九四三年には「皇道朝鮮研究委員会」の会員になった。この団体は朝鮮の皇民化促進、その現実紹介、内地における協和事業に対する協力、あるいは文学者現地派遣の人選などを担当する機関として日本文学報国会の傘下にあった。張赫宙には一九四五年までの約一五年間に三〇冊ほどの単行本があり、長篇小説が一五篇、中・短篇が五〇篇、戯曲などその他が九篇などにのぼる。戦後日本に帰化し、野口稔という名前で創作を続けた。

これまでの張赫宙に対する評価は林鐘国の『親日文学論』の中で論じられた「張赫宙論」が代表しているように親日作家という印象が強かった。韓国内では彼の作品がほとんど日本語によるものだったためか作品研究がなされていない状況である。おもに戦時期の時局に賛同する発言や態度が問題されてきた。日本では一〇年くらい前から白川豊氏らによって張赫宙の日本語作品だけではなく、朝鮮語作品も研究され始めている。

## 二．「開墾」執筆の経緯

張赫宙は一九三九年と一九四二年の二度にわたって満洲開拓地を視察した。彼は一九三九年二月の第二次ペン部隊の一員として、拓務省と大陸開拓文芸懇話会の派遣という形で高見順、小田嶽夫、荒木巍、井上友一郎らと共に約三ヶ

月間〝満洲〟等を巡っている。大陸開拓文芸懇話会とは、大陸開拓に関心を持つ文人たちが、拓務省との連携の下に文学報国の実をあげようとした団体で、三九年二月の発会式には張も二〇余名中の一人として参席している。このころから張赫宙は〝日本人〟としても発言が多くなり、同年一〇月に出版された『大陸開拓小説集（一）開拓地帯』でも日本人以外ではただ一人、短篇を載せている。(41)

二度目は一九四二年五月一九日から六月八日にかけて総督府拓務課の委嘱により〝満洲〟の開拓村を視察した時である。「開墾」はこのように、張赫宙が並ならぬ関心をもっていた〝大陸開拓〟を描いた張赫宙の意欲作であることが分かる。

## 三、作品分析

### ア、万宝山事件の文学的変容

「開墾」はほかの三つの作品と比べ、字数が最も多く、長い期間をあつかっており、万宝山事件を含む中国東北での中国、朝鮮、日本の問題を総体的に反映している。張赫宙は二回も〝満洲〟訪れ、大陸開拓文芸懇話会に参加するほど、〝満洲〟に強い興味をもっていた。「開墾」の構想は初めての〝満洲〟訪問から暖めてきたものであろう。他の作品と比べても創作条件としてよかったのは、この作品が万宝山事件の一二年後に書かれたことであろう。その間作品を書くための資料を充分にそろえ、事件の当事者にもあって取材することができた。李輝英は長篇小説である「万宝山」を事件の一年後に二ヶ月間で書き上げ、伊藤永之介は「万宝山」を万宝山事件の発生後一ヶ月足らずで書き上げた。(42) いち早く万宝山事件を作品に仕上げ、読者に読ませたことには大きな意味があるが、作品の質的な面から言えば、急ごしらえという感じがする。

張赫宙の場合は万宝山事件の前後五、六年間を描いており、朝鮮農民が希望を抱いて中国東北地方に移民するが、開

墾をした土地から追いだされ、やっとの思いで万宝山に入った過程を描くことにより朝鮮農民の万宝山への執着に説得力をもたせている。

「開墾」には「万宝山部落建設記」という副題がついている。作者の述べた三段階のうち、一段階―万宝山に定着する前の朝鮮移住農民の苦衷―と二段階―万宝山事件―は満州国建設がいかに朝鮮人に平穏な生活を与えてくれたのかを引き立てて見せるための試練にすぎない。それについては後節で詳しく述べる。

イ、国策的性格

張赫宙は作品を書いた目的について次のように述べている。

> 避難前後から万宝山事件まで読んだ読者は、建国後の建設時代になると、ぱっと明るい気持ちになることと思うが、私は二度の満洲開拓地視察で、以上の結論が間違っていないという自信を得ている。
>
> 今日の開拓民の生活は幸福である。万宝山部落民に比べて、何と恵まれた条件のもとに開拓に従事していることであろう。
>
> これら開拓民に、そして一般読者に（満洲国民、中華民国の人も勿論）満洲建国の高い理想を把握する方便としても、この小説に描かれた事実を知ることは必要ではなかろうか。
>
> それから、今日満州国では五族協和の実を挙げているが、この小説でもその点は描いたと思っている。(43)

白川豊氏はこれに対して、これは弁解に近いもので、実はこの点に力点が置かれてはいないと解釈している。その理由は全一一章のうち一〇章分を費やして、生存競争の現実が描かれていることと、日中の政治力学の谷間で、現地

人との軋轢の中で苦悩しつつ生き抜く朝鮮農民の姿を描くことが、何よりも中心になっていることであると述べている。[44] また彼は、張赫宙が常に公平な立場から描こうと努力しているように見える[45]とも述べている。

しかし本当にそうだろうか。作品の量的には万宝山事件の前後が十分の九を占めているとしても、作家が強調したいことは〝満州〟国建設の明るい未来であり、前の部分もこの大団円に向かっているといえる。その上作品の大部分を費やして描いたのは朝鮮農民の苦しい境遇であっても、その時の朝鮮農民と日本警察の関係や朝鮮農民の意識が問題である。

作品全部を通して朝鮮人も自らが日本の国民であると意識し、日本の警察も朝鮮人を日本人として認め、保護することに徹底しており、両者は常に良好な協力者関係にあり、共同体意識が強く強調されている。

ウ、人物の形象化

この作品には個性的な人物たちが鮮やかに描かれている。李輝英の「万宝山」は中国農民と朝鮮農民を一つの集団として描き、馬宝山、金老人、李竟平などの人物をはっきりした個性の持主として描けなかった。伊藤永之介の「万宝山」に登場する趙判世と裴貞花は朝鮮農民の代名詞のような感じで物語の展開を引っ張っていく力を持っていない。「農軍」においても同様のことがいえる。「開墾」では三星、永俊、昌五、崔世謨、申義達などがみなそれぞれはっきりした個性をもち、各々の目的を持っており、同じ朝鮮農民といっても十人十色といえる。

敢えて言えばこの作品の主人公である三星は血気盛んな若者だが、真面目で同族への愛と開墾への意志がとても強い。永俊は三星といちばん仲がよかったが、一回根をおろして開墾した土地はもう自分たちの故郷だと言い張り、中国の兵隊が攻めてきても農地を守ることに徹した。その誠実さが災いし、彼の一家は無惨にも殺されてしまう。崔世謨は実在した人物崔世模をモデルにしていると思われる。一九三一年七月一〇日の『朝鮮日報』の「三七戸の二一〇

人開眼奥地から移来」という記事には万宝山現地に居住していた朝鮮農民の名簿が載っており、姓名、年齢、本籍地、万宝山地方に来る前の居住地と家族人数が記されている。その中に「崔世模、五五歳、本籍―慶州、前居住地―開原、家族数―八人」という人物がいる。[46] 崔世謨は両班出身で儒者でもあり、その人望と賢明さで万宝山の朝鮮農民を団結させ、有事の際には精神的の支えとなっている。出番は少ないが、軽はずみで冗談好きのひょうきん者六出やずる賢い東術なども脇役をしっかりつとめている。

また朝鮮人の中でも申義達のように、ほかの朝鮮農民を小作農として自分が地主になる下心を持つものも登場する。また出身地域による言葉と習慣の違いが災いし、朝鮮人どうしをいがみ合ってしまうことも描かれている。[47]

「開墾」に登場する中国人も人物数は少ないが、朝鮮人から稲作を学ぶ陳哥、局長である兄の威勢を借りて我が物顔で振る舞い賄賂を受け取る馬三爺、彼とは正反対に清廉潔白なその局長である兄などがおり、中国人という一つの集団ではなく個性的な個人として描かれている。

## 第四章　むすび

本稿で取り上げた四作は万宝山事件の直後若しくは一〇年後に書かれた作品で、それぞれの作家が相違する観点や目的を持って事件を作品化したものである。筆者は万宝山事件に対する主な先行研究を基にして、それぞれの作品を分析した。しかし筆者が捉えた万宝山事件のとらえ方がすべてとは限らない。

李輝英の「万宝山」を通しては、それが最初の本格的な抗日長篇小説であることを明らかにした。李輝英はこの作品をもって中国・朝鮮両民族の団結を声高に訴え、日本帝国主義の爪牙の下で苦しんでいる中国東北地方の現状を広く知らせた。彼の東北地方に対する関心や朝鮮人との共存の問題に対する興味は尽きることなく、後の作品にも現れた。

伊藤永之介の「万宝山」は日本人が中国東北地方に移住した朝鮮人の悲惨な境遇を描き、その原因に日本帝国主義

があることを暗示したが、検閲の問題もあり、その追及は徹底したものとは言いがたい。しかし彼が「万宝山」を書いたときに朝鮮の青年が身近にいたことから、その青年から協力を得て、朝鮮人の生活がリアルに書けたと思われる。「農軍」は李泰俊の作品のなかでは異例のもので、現実克服の意志が評価されてきたがそのやむをえぬ対日協力的な性格を帯びざるを得なかった点も指摘されている。本稿では李泰俊の「満洲紀行」と「農軍」を対照して、この問題を明らかにし、李泰俊が雑誌『文章』編集に携わっていたことが彼に妥協を強いたという状況を突き止めた。また「間島移民文学」の流れを汲む作品として間島移住民の生活をリアルに描いたことを、唯一この作品のみが明示した言語問題により論じた。

張赫宙の「開墾」は彼の並々ならぬ〝満州国〟への関心が執筆せしめた作品である。彼が〝内鮮一体〟論に基づき、日本語による創作にこだわりつづけたことは単純に売国努と呼ばれる露骨的で従順な親日行為ではなく、彼なりに考えた近代化の追求であったこと、しかしその近代意識は限界があったといえよう。〝太平洋戦争〟末期に日本帝国主義に屈し、本意であれ不本意であれ対日協力的な作品を発表し、活動を行った文学者は稀ではない。今もその行跡が文学者への評価に影を落としているが、張赫宙のように徹底的に忘れ去られた例は殆んどいない。それは彼が戦後日本に帰化したことによるところが多いのではないか。彼は日本語で創作活動を行い、植民地時代に支配者側に協力しただけではなく、戦後にも朝鮮語を捨て、朝鮮人として生きることを拒否したといわれている。(48)

注

(1) ここで述べた事件の経緯は朴永錫『万宝山事件研究—日帝大陸侵略政策の一環として—』(亜細亜文化社、一九八五年)及びその他の論文(後掲)を参考にして要約したものである。

(2) 緑川勝子「万宝山事件及び朝鮮内排華事件についての一考察」p. 一三五(『朝鮮史研究会論文集』特集『明治百年と朝鮮』所収、一九六九年)

（3）臼井勝美「朝鮮人の悲しみ―万宝山事件―」p．一〇二（『昭和史の瞬間・上』所収、一九七四年）
（4）緑川勝子前掲論文　pp．一四〇―一四一
（5）太平洋戦争研究会著『図説　満州帝国』pp．五八―五九（河出書房新社、二〇〇一年）
（6）〝適値〟九・一八〟事変発生、開始写些反日的文字、意在報復。〟李輝英「我従事文芸創作的一段経歴」p．二七（『新文学史料』二号、一九八二年）
（7）『北斗』第二巻第1期特大号（一九三二．一．二〇）
（8）蔡宗雋、呂宗正「李輝英和他的抗戦文学創作」p．九六（『社会科学戦線』五号、一九九五年）
（9）王吉有「東北抗日文学的先声―評李輝英先生的長篇小説『万宝山』」p．二八八（『抗戦文芸研究』一九八六年第三期）
（10）〝作者借一個朝鮮僑民金老頭子的嘴巴演説了朝鮮人的痛苦、日本帝国主義的凶暴、作了一次政治的煽動：作者又写万宝山的農民如何漸漸対于那些被圧迫的朝鮮農奴発生了〟階級的同情〟、而且最後成立了一条戦線：作者努力使階級意識克服民族意識〟「書評」東方未明　『文学』第一巻第二期　一九三三年七月
（11）注9の王吉有の論文には李輝英が数回にわたって東北に行き、調査を行い、その材料をもとに「万宝山」を書いたとある（p三四）。しかし出版されたのが一九三三年一月で東北への調査旅行は一九三二年七月という時間だけに注目しており、執筆期間の一九三二年三月から五月三〇日までという、すなわち調査旅行より先に書かれたことを考慮しておらず、間違いであると思われる。
（12）朴永錫の前掲書p八四にある「地主蕭翰林張鴻寶等十二人與郝永徳所訂租地契約」（中国国民党中央委員会党史史料編纂委員会『革命文献三三号』（台北一九七〇）pp．五〇五―五〇七）、p八五にある「郝永徳與韓人李昇薫等九人所訂転租契約」（前掲書『革命文献三三号』pp．五〇七―五〇九）と一字も違わない。
（13）「吉林韓僑万宝山事件討究委員会敬告中国同胞書」一九三一年七月一〇日、「在韓華僑惨案に対する声明：東省韓僑団体」一九三一年八月一日、「南京韓僑宣言」「上海韓人聯合会宣言」など。
（14）「作者並没有把久在日本帝国主義武力控制和経済侵略下的〝東北〟的特殊社会状況很顕明地表現出来。」「写東北的社会状況而忘記了日本帝国主義経済勢力之独占的控制與深入、便是很大的錯誤！「万宝山」的作者也就在根本上犯了這錯誤！」「書評」東方未明　『文学』第一巻第二期　一九三三年七月p三四五

(15) 「而且最後、成立了一条戦線：作者努力使階級意識克服民族意識。如果説「万宝山」這部小説畢竟有無可取之処、那也許只在一点上。」前掲論文p三四六

(16) 李輝英「自序」『豊年』所収（王吉有前掲論文参照）

(17) 塡平壕溝！被圧迫的老百姓們連合起来！打倒欺騙老百姓的官僚！打倒圧迫弱小民族人的日本帝国主義！実行武力自衛！全世界革命成功万歳！（「万宝山」p．二三八）

(18) 打倒日本帝国主義！打倒一切帝国主義！中韓被圧迫民衆連合起来！中韓民族解放万歳！（同上p．二四四）

(19) 釜屋修「伊藤永之介と趙樹理―二人の農民作家」（『駒澤大学外国語部研究紀要』一七、一九八八）

(20) 「伊藤永之介年譜」高橋春雄作製（『日本現代文学全集八九』講談社、一九六八）

(21) 〝プロレタリア風の作品では、『転換時代』の外に、伊藤永之介の『万宝山』と、窪川いね子の『祈祷』と、徳永直の『栄子の場合』と、下村千秋の『嵐・西へ西へ』（この作はルンペン文学といふのか？）とを読んだ。先の『転換時代』を加へて総計五編の中で、『万宝山』が図抜けて優れてゐた。この作は朝鮮人のルンペンを扱ひ、下村千秋の『嵐・西へ西へ』は日本人のルンペンを扱ってゐるが、これは真の自然と人間を書き、他は絵空事の自然と人間を現してゐる。荒涼たる満洲の道なき道をうたひながら定めなき浮浪をしてゐる百姓の一家とその同胞と、鼻歌をうたひながら或は逃げ場所をあてに東海道中を物乞ひしながら旅する人との違ひである。（中略）かういふ生温かい言葉でいひ尽せない程、この作は近頃の私の読んだ小説の中で心を打たれた作の一つである。〟宇野浩二「文学の眺望」（『改造』、一九三一．一一）

(22) 宮本顕治「文芸月評（一）藤森成吉の「転換時代」・その他」（『東京日日新聞』、一九三一年九月二五日）

(23) 一九二二年―中西伊之助「赭土に芽ぐむもの」（朝鮮）
一九二六年―里村欣三「苦力頭の表情」（中国東北部＝「満洲」）、「シベリアに近く」（同）
一九二七年―黒島伝治「櫓」（シベリア）、平林たい子「施療室にて」（中国東北部）、里村欣三「放浪の宿」（同）
一九二八年―黒島伝治「雪のシベリア」（シベリア）、「渦巻ける鴉の群」（同）、「パルチザン・ウォルコフ」（同）、「穴」（同）、森山啓「火」（朝鮮）
一九二九年―黒島伝治「氷河」（シベリア）、「捕虜の足」（同）、「砂金」（同）、槙本楠郎「土工」（中国東北部）、前田河広一郎「セムガ」（同）、平林たい子「敷設列車」（同）

江崎淳「植民地支配を告発した作品―中西伊之助・伊藤永之介を中心に―」（『民主文学』二八五、一九八九年）

(24) 慎根縡「プロレタリア文学論の受容様相―韓・日関係を中心に―」（『東国大学日本学』一一、一九九二・八）

(25) 伊藤永之介「文学的自叙伝」p．一五九（『新潮』昭和一四年二月）

(26) 同上　p．一六〇　「これは植民地小説の一つであるが、「見えない鉱山」「山の一頁」「暴動」とつづいた鉱山もののあとの足かけ二年の間は、私は絶えず植民地に関する文献を読んだり材料をさがしたりしてゐて、台湾からはじめて満洲から朝鮮にわたって四つ五つの植民地ものを書いた。」

(27) 平野謙「作品解説」『日本現代文学全集八九』p．四〇八

(28) 杉森正弥「伊藤永之介と李輝英の「万宝山」―日本・中国文学に於ける朝鮮人像」p．二二一　〝平野謙の読みぞこないであろう。〟（『語学文学』一五、一九七七）

浦西和彦「伊藤永之介の「梟」について」p．一一〇　〝これは全く平野謙の読み違えである。〟（『民主文学』一五四、一九七八）

(29) 『鴉』「序文」（平野謙「作品解説」（『日本現代文学全集八九』から再引用）

(30) 横光利一「頭ならびに腹」p．三九六（『定本横光利一全集第一巻』河出書房新社、昭和五六年）

(31) キム・ジェヨン（김재용）等『韓国近代民族文学史』p．七〇五（ハンギル社（한길사）、二〇〇〇年）

(32) Yahoo 国語辞書 http://kr.kordic.yahoo.com/result.html

(33) 李泰俊「満洲紀行」p．二八九『無序録』所収（博文書館、一九四四年）

(34) 李泰俊前掲書pp．二八七～二八八

(35) 張作霖は一九二八年爆殺されたので、万宝山事件が起きた一九三一年七月は張学良政権時代とすべきである。

(36) 「李泰俊短篇〈農軍〉の対日協力的性格」ジャンヤンス『東義論集第二三集人文・社会科学篇』一九九六、二

(37) 同じ作品群を指して〝間島）移民文学〟（呉養鎬）、〝失郷小説〟（李正淑）、〝中国内朝鮮人小説〟（ジョナムチョルス남철）、亡命文学などの用語が使われているが、筆者はその性格をもっともよくあらわしている間島移民文学という呼称を用いる。

(38) 呉養鎬『農民小説論』p．二〇八（蛍雪出版社、一九八四年）

(39) 白川豊「張赫宙の初期長篇作品について」（『史淵』一二三、一九八六）、「張赫宙の日本語小説考（一九三〇―一九四五）」（『史淵』一二四、一九八七）を参考に整理した。

(40) 「張赫宙・作「開墾」について（解説）」白川豊　p．三（『開墾』日本植民地文学精選集〇〇九　朝鮮編三ゆまに書房、二〇〇〇）

(41) 白川豊『植民地期朝鮮の作家と日本』pp．一八三～一八四（大学教育出版社、一九九五）

(42) 『日本プロレタリア文学集一〇―「文芸戦線」作家集（一）』（新日本出版社、一九八五．一一）に収録されている「万宝山」の末尾に記されている脱稿日は一九三一年七月二五日である。

(43) 注40と同様

(44) 白川豊前掲書p．一五二

(45) 同上p．一五三

(46) 朴永錫前掲書pp．八五―八六

(47) 「その新しい三世帯は、この間島地方に多くいる北部朝鮮出身の移民たちと、なにかと折り合いが悪く、仲間はづれにされた苦しみに堪えかねたのだが、同郷の者が大挙して来たとい噂に、もう矢も楯もたまらない気持ちになって、家をたたんで、この集団に加はりに来たというのであった。」pp．一九―二〇

(48) 全光鏞『韓国現代文学論考』「張赫宙の祖国と文学」p一二六